伝々夢詩

No.12　　2015/05/07

愛西学園・愛知黎明教育研究所通信　　発行責任　　佐藤廣和

井上先生が「校長通信」で”学習観の転換”について高校生達の実感や疑問を通して書かれていますので、私の講義で学生が書いてきた感想を紹介します。講義名は「教育技術論」で、主にフレネ教育を素材として論じています。

「学習意欲」という言葉を聞いて、「本当の学習意欲」について考えました。私は中学・高校とずっと勉強ばかりしてきました。それは一見「学習意欲がある」と見えるかもしれません。しかし私が勉強していたのは「親や先生にほめられたい」「成績がよかったらうれしい」「受験に合格するため」という風に勉強することで得られるものがあったからなのだろうと思います。「学習そのもの」へ意欲は向いていなかったように思います。もちろん「分かったからうれしい」「おもしろいな」と思うこともありましたが、「学ぶのが楽しいから学ぶ」ということはあまりなかったように思います。ただ勉強することを学習意欲が高い、と見るか、一見勉強には見えなくても感性を働かせて様々なことを学びとって「学ぶのが楽しい」と感じている姿を学習意欲が高いと見るかで、この意欲への考え方が変わってくるように思いました。

＜1/2＋1/3＝？＞

1/2＋1/3＝2/5と答え、「うちの兄妹は２人で男が１人、隣の家の兄妹は３人で男が１人。兄妹は合計５人で、そのうち男は２人だから。」と理由付けする生徒を正解に導け。という問題を出すと、８０人の学生は誰も答えられない。つまり、教員を目指す大学生は自分では「できる」のに誤答を正答に導くことができません。（つまり学生もわかっていない。）以下は、教師の力は正答をわかりやすく教えるだけでなく、誤答を正答に導く力が必要だという講義の感想です。（ちなみに、この問題は数年前の三重県教員採用試験に出題されたそうです。）

「できる」ことと「わかる」ことは違うというのは私もそうだと思う。塾で生徒に数学を教えるときに、私は「ここをこうして、こうなる。だからこう」と生徒に丁寧に教えている。生徒は、うなずきながら私の言葉通りに問題を解く。答えが出たとき生徒は「できた」と喜ぶが、私がすかさず「わかった？」と聞くと「わかんない」と生徒は言う。生徒の言う通り、新しい問題を解くときは同じように計算が進まない。この経験を通して、生徒に「できる」ようにするのは簡単だが、「わかる」ようにするのは難しいと感じた。「できる」だけでは、同じ操作を繰り返すことができるだけで、応用されるとまったく通用しない。根本から「わかる」でないと使いものにならないのだと思う。私は「わかる」ためには、自分で考えなくてはいけないと思っている。そのため、教科書の内容の詰め込みでは、だめだと思う。もっと生徒に考えさせることが必要であると思う。また、考えるというのは集中力を使う。この集中力の源となっているのは前の講義で出てきた「興味」だと思う。今回自分の中で、この講義と前の講義がつながって、改めて、教育はとても奥が深いのだなあと感じた。

＜オタマジャクシやカエルは教科書のために生きているわけではない＞

小学校中学年の理科ではカエルの変態を扱う単元があります。例えば、子どもが足の出たオタマジャクシのことを日記に書いてくると教師はどうやって教科書のカエルに結びつけるのかで頭がいっぱいになりがちです。子どもの日記を紹介し、クラスの子どもたちが「ぼくも足のはえているカエルを見た。」「しっぽが短くなっていたよ。」などと活発になっていくと、教師は教科書のカエルにいつ移ろうかとタイミングをはかる。そんな時、ある子どもが「昨日の夜、バオンバオンて、とっても大きな鳴き声がしてこわかったら、お父さんが『あれは食用ガエル

の鳴き声だよ』って教えてくれたの。カエルを食べるなんて変なのって思った。」などと発言すると、子どもたちはびっくりしてしまう。

「カエルを食べるなんて、変なの。」

「気持ち悪い。」

「ぼくカエルを食べたことあるよ。トリみたいな味だった。」

こんな話で教室がわきたっていくと、顔は笑っていても教師の心の中は穏やかでなくなってくる。「早く本筋（教科書のなかのカエル）に戻さなくては」とあせり、

「ハイ、静かにして！さっき足が出たオタマジャクシのことを話してくれたよね。とってもいいところに気がついたね。今日はこの勉強をしましょう。教科書の37頁を開けて。」

という教師の声で、教室はいつもの静けさに戻ってゆく。

＊このようなたとえ話をするとほとんどの教師が胸に手をあてるほど、子どもが学校で持ってよい興味は「学校臭い分別」（フレネ）のなかにある。しかしこの教師がフロリダ大学のマーヴィン・ハリス教授の手になる『食と文化の謎』という本の存在を知っていたら、芋虫やバッタを食べる食文化とそれに嫌悪感を持つ食文化という違いがどうして生まれたのかという視野に子どもを導けたかもしれない。

以下はこの回の講義に関する感想です。

日本においての教育で子供の興味を学習に利用することは多いと学んだ。私が覚えている限りでは、自由テキストのような文章の中から抜粋するような事はなかった。しかし、授業の単元の導入部分で先生が日常生活にリンクさせた授業内容に導く質問をして、出して欲しい答えに誘導し、最後に必ず「それでは今回の授業に入っていきましょう」と言っていた。私は子どもの興味を利用するというのはもともとある興味を利用するだけでなく、興味を引き出す所からはじまるのだと考えた。授業内容に入ってしまった中で先生の問に対し、「教科書に書いてあるから」という理由で答えを出す生徒は多くいた。そこでプリント2）の「教師が子どもを一定の型にはめこむ発想」にあてはまると思う。その批判というのは子ども達が教科書のような一般的思想、固定概念にとらわれてしまい、発展や応用にいかせなくなり、学びの追究がおとろえることを考えてだと感じた。

今日のカエルの話は本当によくある話だと思いました。私も教育実習である単元を教えるために自然な流れで導入しようとして、生徒のある話題から、それをひろって、それを利用して導入しようとしました。ですがやはり先生のおっしゃったように、なかなか自分のもっていきたい話にならず、無理矢理自分のもっていきたい方へ話をむけてしまって自然な流れにはなりませんでした。そこで自然な流れにもっていけない自分に力不足を感じました。しかし、私はまさに生徒たちを型にはめようとしてしまっていたのかな、と今日の講義を聞き、感じました。実習のとき、「いかにその単元に入るために上手く導入するか」を常に考えていました。自然に導入が進んだときは「上手く授業が進められた」と思いこんでいました。しかし、これはまさに自己満足にすぎなかったのかもしれないと思いました。自分のもっていきたい方向というのを事前にもち、それに生徒をあわせようとする授業はまさにフレネ教育とは反対の教育なのだと思いました。しかし、いくら生徒の興味・関心から学びを育てたいと思っても、どうすればいいのか正直わかりません。どうしても教科書を使わざるをえません。自分が教師になったとき、どのようにしていけばよいか、考え続けていかなくてはならないと思いました。

＜補足＞英語圏を中心に展開している「ホール・ランゲージ」という教育法は、誤答分析を研究してきたK・グッドマン教授が提唱したもので、アメリカ合衆国やニュージーランド、オーストラリアなどに広がっています。